

副病院長挨拶

著者	田中 卓男
雑誌名	鹿児島大学歯学部紀要
巻	32
ページ	3-4
発行年	2012
URL	http://hdl.handle.net/10232/17048

副 病 院 長 挨 拶

副 病 院 長 田 中 卓 男

昨年4月から鹿児島大学病院副院長・歯科担当を拝命いたしました。歯学部および附属病院歯科の皆様にご挨拶を申し上げます。私の所属は医歯学総合研究科では咬合機能補綴学分野（旧歯科補綴学第一講座）ですが、診療科は冠・ブリッジ科を担当しています。出身は北海道大学です。昭和48年に歯学部を卒業後、同大学大学院を経て、東京医科歯科大学の医用器材研究所に2年間勤務しました。その後、長崎大学歯学部で16年を過ごした後、平成8年に自見教授の後任としてこちらに着任しました。血液型がA型にもかかわらず、性格は極めてズボラです。定年までの2年間は趣味の世界を優先しながら、早めに仕事の幕引きをしようと考えていました。ところが、この計画がどこから漏れたのか、附属病院が忙しさをきわめるこの時代に遊ばせておく人的資源の余裕はない、猫の手よりはマシだろうということで、副院長に指名されてしまいました。このような人材を歯学部から押し付けられた熊本一朗病院長にはお気の毒としか言い様がなく、誠に申し訳なく思っています。私が至らない分、病院長補佐だけは慎重に選任しました。いずれも超辛口のご意見番で、少しは遠慮して意見具申をしるよなといたくなる皆さんです。しかし、現在の課題が山積した附属病院歯科（歯科病院）を運営していくために必要な人選ができたと考えています。

さて、副院長として最初に取り組まなければならなかったのは、歯科病院の移転関連です。副院長に就任が決まった今年（平成23年）の1月の時点では、歯科病院は医科病院の外來棟を改装して10年以内に移転することになっていました。面積的には現在の7割程度に縮小されます。移転が10年後でも、設計だけは23年中に済ませて予算要求をしなくてはなりません。それまで、新歯科病院のコンセプトについての検討は

なされていませんでした。4月からは大好きな溪流釣りも諦めなければいけないと思い、3月1日のヤマメ釣りの解禁以来、3月中は熊本県五木村や宮崎県椎葉村に通い詰めました。どちらも標高が高いため、日中でも吐く息は白く、朝方は氷点下に冷え込みます。休日はもちろん、平日も休暇をとって出かけましたが、吹雪に巻かれながら、寒風に震えながらの孤独な釣行です。副院長になる運命を呪いながら、新病院のコンセプトを考えながら竿を振り続けました。結局私の頭では斬新かつ起死回生となるようなアイデアはほとんど浮かばず、唯一思いついたのは、開業医の先生となるべく競合しない、大学らしい歯科病院というコンセプトです。3月の極寒の中ですから他の釣り人はいなくて、毎回釣りは独占状態というより、コケて動けなくなったら、発見されるのは随分先だろうな状態でした。そんな状況だったため、こんなコンセプトが浮かんだのかもしれませんが。ちょっとだけ具体的には、大学の得意とする全身管理の機能を重視して、外科矯正や重度有病者の治療、日帰り全麻や障害者治療、骨移植やサイナスリフトを伴うインプラント治療、高度なオペを必要とする歯周病治療などを行なう外科的な部門から歯科病院の設計を開始しようというものです。現在の専門診療科（2診）や総診（1診）は予算請求に必要な基本設計に留めておいて、今後の10年間の社会情勢や大学病院の状況の変化に応じながら具体化を進めていくというものです。タイムリミットが迫っていることもあって、こんな方針で設計を進めることになりました。10年後にもこの鹿大病院に残っている筈の若い先生たちがグループを作り、日夜議論を闘わせつつ具体的な設計の基礎資料を作りました。それをもとに、各診療系を代表する教授メンバーが具体的な設計を完成させました。ところが、12月現在、10年後の

移転計画は白紙になっています。これは、歯科が入る予定の建物の耐震強度不足が明らかになったためで、改修だけでは対応し切れそうにありません。病院長は大学本部に対して、歯科の入る部分も含めて外来棟の新築を強く要求しています。今後の展開は明らかではありません。しかし、歯科が医科に先駆けて設計を済ませていることは、今後の新歯科外来の位置や面積を再検討する附属病院全体の議論において、極めて有利に働くと思います。

その他には、電子カルテの導入やエックス線撮影のフィルムレス化など、金喰い問題虫がワンサと発生しています。老朽化したユニットの更新も焦眉の急です。幸い、歴代病院長は歯科の置かれた困難な状況を同情的に見てくれています。しかし、歯科病院が自助努力を怠れば、病院長でもかばい切れなくなって新歯科病院の構想はどんどん縮小することでしょう。15年から20年後と予測される歯科医不足、医者過剰の時代が到来しても、回復できるという保証はなくなります。新病院に移るまでの10年近い期間をどうやって乗り切るのか、一度しっかりした議論をしなくてはなりません。

副病院長を拝命してから11ヶ月が経過しました。まだ、1年弱しか経っていないのか、というのが正直な気持ちですが、3月にヤマメ釣りも今生のやり納め、竿に封印をして押入れに仕舞うという悲愴な覚悟していた程には追い詰められていません。筋トレも、以前のようにSEIKA 宇宿店に週5回というのは無理ですが、平日に1回と土、日の2回で、計3回は確保しています。楽ではないにしろ、想定していた程には厳しくないのはどうしてか。どうやら分ってきました。結局、副病院長業務の大部分は、附属病院や総合研究科の事務職員の皆さんのプロフェッショナルリズムに支えられています。それまで、ただのクラウン・ブリッジの教員だった人間が副病院長になったからといって急に病院運営ができる筈がありません。プロのアドバイスとサポートがあるからやっていると考えています。

過大な課題を抱える鹿大の附属病院歯科。でも皆さんの努力によって、押し潰されることなく少しずつ着実に発展を続けています。新年も稔りある良き年となることを祈念して私のご挨拶とさせていただきます。